令和５年度第１回静岡県立看護専門学校学校関係者評価委員会会議録

日時	令和５年８月２日（水）午後３時 30 分から午後５時 40 分
場所	静岡県立看護専門学校会議室
出席者 職・氏名	（委員）平賀聖悟（三島総合病院名誉院長） 杉山眞澄（静岡県立大学特任准教授） 石田盛己（臨床心理士）　（委員３名　敬称略、順不同） （学校）鈴木隆一校長、稲寿美代副校長兼教務課長、山本晃総務課長、 長谷川明子看護１学科長、渡邊静世看護２学科長、廣瀬順助産学科長
議題	・学校自己評価について
配布資料	・令和４年度静岡県立看護専門学校自己評価表

１　開会あいさつ

（鈴木校長）

本日は学校関係者評価委員会の開催にあたり、委員の皆様には御多忙の中御出席いただき、お礼申し上げる。また引き続き委員に就任いただき感謝申し上げる。

この会議は、専門的な知見を有する外部の学校関係者の方からのご意見をもとに、課題等の解決に向けて取り組み、適正な学校運営を図っていくということを目的として、令和２年に設置し、毎年度、開催をしている。

今回評価の対象期間である令和４年度については、コロナ禍が続く中で、感染状況により、臨地の実習が難しい場合などは学内での実習に切り替えるなど、一部においては通常ではない学校運営となっているが、学生の学びの質が低下することがないように工夫して、取組を行った。また、ICT 化を推進するという方針を打ち出し、推進の体制づくりや、予算の確保に向けてなど、ICT を活用した効果的な教育を実践できるよう、準備を進めることができた。今年度の新入生からは、タブレット端末を使って授業を始めている。こうしたことを踏まえ、学校として自己評価を行ったところである。

委員の皆様には、当校の学校運営や教育活動等に関する令和４年度の自己評価、取組状況について、忌憚のない御意見をいただきたい。

２　委員長選出

・静岡県立看護専門学校学校関係者評価委員会設置規程に基づき、委員の互選により委員長を平賀委員に決定した。

（平賀委員長）

この評価委員会の設置規程を拝見し、所掌事務として、学校評価に関する要綱に基づいて実施する学校自己評価の結果についての必要な意見交換と、その他学校運営及び教育活動の改善に必要な事項の２つを確認した。我々委員が見て、質問なり意見を申し上げれば役割を果たせると思うので、２人の委員の皆様、よろしくお願いします。

３　結果概要

・委員長が議長となり、資料１に沿って、教育理念・ 学校運営等の９大項目について各項目ごとに、鈴木校長から、令和４年度の取組、職員アンケート結果、これらを踏まえた学校自己評価結果を説明のうえ、各委員から自己評価結果に対する評価、御意見をいただいた。

・委員からの質疑、評価及び学校からの説明

(1) 教育理念・目標

（杉山委員）

保護者への周知が十分でないとは、機会がなかったということだけか。理解されていないと思うような事例や意見があったということか。

（稲副校長）

具体的な出来事があったわけではなく、オリエンテーションや入学式等の限られた機会では伝えているが、コロナ禍で保護者に出席いただく行事等が実施できず、意見をいただき確認できる機会をもつことができなかった。

（石田委員）

個別の項目でいうと、(4)「学校の理念・目的・育成人材像・特色・将来構想などが学生・保護者等に周知されているか」というところが不適切であるというのが 50 パーセント、という評価になっているというのが、今説明があった理由の表れというふうに理解すればよいという感じか。学校としては、わかるように伝えているが、それに対する反応を聞く機会があまりなかったということですね。

（平賀委員長）

前年度と比べると、（２）の「学校における職業教育の特色は明確になっているか」などは点数が上がっているが、「学校の理念・目的・育成人材像が学生・保護者等に周知されているか」は若干点数が下がっていて、今の質問にあった点に若干これが反映されている気がしなくもない。

学校の方で実施した、学生の名札の裏に教育目標を記載、とは、どのように教育目標が書かれていたのか。

（稲副校長）

看護１学科、２学科、助産学科とも、８項目の教育目標があり、それを常に意識できるようにしている。

（平賀委員長）

学生がそれを頻繁に見るとか、学生にある程度インパクトがないと、効果がどのくらいあるのかわかりにくいと感じる。

(2) 学校運営

（石田委員）

小項目（８）「運営組織や意識決定機能は規則等において明確化されているか、有効に機能しているか」というところが、不適切、やや不適切が 50 パーセントで、去年もそんな感じだった。職員の半数が不適切、やや不適切と感じているというのは、なんとかしなければいけないところと思うが、不適切、やや不適切と回答したその先生が、どんな思いを抱えているのかがわかってくるとよいと思う。

（鈴木校長）

教員がどこに不適切と感じる部分があるのかは、実際に聞かないとわからないところがある。どういう受け止め方をしているのか、進め方のどこに不適切と思う部分があるのかというようなことは聞きたいと思い、私も教員と直接、１対１の面談をやっているが、こうしたことも含め、教員と認識に大きなギャップがないように、取り組んでいきたいと思っている。半数の職員というのはあまりにも多いので、確認したい。

（石田委員）

面談で直接聞くという方法や、アンケートみたいな形で聞く形もあると思うので、不満なのか思いなのかを抱えている先生方の思いをくみ取る機会のようなものをつくってあげられるとよい。組織がギクシャクしたり、職員の中途退職に繋がる場合もあったりするので、そういう思いはできるだけ減らしてあげるといいかと思う。

（杉山委員）

受け止めの基準が多分違うんだろうと思う。組織の風通しのよさと比例するのではないかという気がするので、こまめに例えばミーティングをしたりしていくと、話し合いの中から組織や運営に反映させられるものが出てきて、上がっていくのではないか。短い時間でもそういう機会をつくっていくと上がっていくと思う。上の人との面接というと逆に言いにくさや人事評価につながる印象もあり、かえってミーティングのように自由に、誰の発言ではなくて、例えば、学科の教育としてこう考えますよ、というようなところが出てくる仕組みにしていったらどうかと思う。

（平賀委員長）

小項目 (9)「人事、給与、教務、財務に関する規程等が整備されているか」これは大幅アップ、それから (11)「教育活動等に関する情報公開」これもかなりアップ。おそらくは、学校側も毎年努力をされてるところもあると思う。評価されてよかった。もう１つ、この (9)「人事、給与、教務」は、ICT 化が基本にあるので、その影響、整備されたり使いやすくなったりというのが反映されているかなという感じがする。ただ、(7)「運営方針に沿って計画的に」のところがむしろ評価が下がっている。公立の柔軟性に欠けるというところに、先生方が感じているところがあるのではないか。

ICT 化は、学校独自の目標ではなく文部科学省の大方針ですよね。iPad で教科書がなくなって、画面見ながらというのは、１年生からというわけではなく、２年生、３年生もそうなのか。

（鈴木校長）
　１年生からである。２年生などは教科書を買っていることもあり、来年はまた新１年生、３年経つと全ての学生がそうなる。ただ、授業だけではなく、教育用電子カルテなども導入し、２年生、３年生も、パソコンやスマホで、ICT を活用した教育を受けている。

（平賀委員長）
　学生は画面だけ見ていて、ノートや紙の教科書だったら書き込みなどができるが、使っていないようなので、補足説明やプラスアルファの話が把握できるのか、若干心配がある。国家試験や、通常の定期試験の結果で出るかもしれないという心配がある。

（杉山委員）
　自分が講義に行っているところはほとんど iPad だが、県立大学だけは、紙の重たいテキストを持ち運んでいる。

（石田委員）
　電子教科書は、書き込んだりはできないのか。

（廣瀬学科長）
　メモ機能とかポストイット機能というのがあって、学生たちが先生の言葉とかを入力すると、それがそのページに反映されていく機能があるので、聞き逃さないように打ちながら聞いている。

（平賀委員長）
　学生は理解力がすごいが、得意な人、慣れている人ばかりではないのでは、と感じる。

（杉山委員）
　紙ベースで、パワーポイントの資料を配ると、それに書く方が多い。打っている様子はあまり見たことがない。

（平賀委員長）
　私が教える学生もそうで、画面をずっと見ているが、書いたりはしていない。紙の教科書はよい点もある。余白に何でも書き込めるから。

（杉山委員）
　講義のとき、テキストのどこのことを言っているかを教えてあげないと、データが異なると違うことを言っている場合もあり、気が付く学生と気が付かない学生がいる。
　小学校などで、問題や問いかけを画面で見せながら答えさせ、答えた子どもの割合が先生の手元でわかるようなものがあるが、そういう双方向の機能は入るのか。

（鈴木校長）
ICT 化は今年度導入を始めているが、予算的には何年かで段階的に進めていく中で、今のお話のようなことを来年度、予算の状況によるが、教育の内容の支援や管理のシステムを入れていくことも考えている。

（杉山委員）
国家試験の問題の意味を読み取れない学生は、文章の読み取りができない、問いがわからないというので、講義の中に取り入れて慣れていけば、トレーニングができ、間違いが多いところを丁寧に対処するという双方向のやりとりもできるかと思う。

（平賀委員長）
ICT 化は、人事管理など職員が使う ICT 化は使っていいと思うが、全部の教科書を ICT 化するのは、学力が落ちないか、少し懸念がある。

（鈴木校長）
学生の姿勢として、メモを取るなど必要なことを自分でどんどん取り込んでいくという姿勢がなくなってはいけないので、教える中で考えており、手法はともかく意識は持ち続けないといけないものだと思う。

（平賀委員長）
メモをとったりすることもなく、画面だけ見ているのは違和感があり、何らかの補足が必要ではないか。使いこなすようにしてほしい。

(3) 教育活動

（杉山委員）
教員の研修には、予算を確保して送り出していただきたいと思う。希望により研修を受けるほか、学会とかにも参加していただきたいと思う。新しい試みをされている教育機関が多いので、学会に参加するとすごく勉強になるし、研修に行く以上に、知り合った人との情報交換で、教員の質が上がる機会になるので、バックアップしていただけるとありがたいと思う。

（平賀委員長）
小項目 (25)「専門領域等における先端的な知識、技術を習得するための研修、資質向上の取組」の項目は、昨年度と比べると、0.2 ポイント下がっている。研修についてはしっかりと取り組んでほしいと思う。また、(23)「人材育成目標の達成に向け、授業を行うことができる要件を備えた教員を確保しているか」の自己評価のところでは、年度途中に退職者が出たけれども、令和５年度に必要な体制を確保しているというコメントがあったが、逆に、そういうことができる要件を備えた教員がむしろ不十分であったのか。
(15)「学科等のカリキュラムは体系的に編成されているか」これは評価が相当上がった。カリ

キュラムが体系的に編成されていると先生が思った結果が得られている。それから、(13)「教育理念等に沿った教育課程の編成・実施方針」これも高評価で、名札の裏面に教育目標を書いて、より周知させるということが含まれているかもしれない。この項目は上がったが、先生方の研修の取組、人材育成目標の達成に向けて教員の確保、そのあたりが足りない。

（石田委員）
昨年度の評価でいうと、(23)「人材育成目標の達成に向けて授業を行うことができる要件を備えた教員を確保しているか」というところ、他に (25)、(26) あたりが、不適切というのが多くなっているが、こちらの資料１の評価・今後の取組に、その確保については、年度中退職者が出たけれども、令和５年度に必要な体制を確保しているとか、職員の研修について、希望を踏まえて受講できるよう配慮しとか、いろいろ書いてあるので、そういった成果が、次回の評価のところで表れて、これらの数値が改善していくとよいと思っている。

（稲副校長）
昨年度の研修の実績としては、学外の研修会には９回、延べ 27 人が参加、学校主催の研修は１回実施し、会計年度任用職員も含めて 20 人が参加、また教員が独自で企画した研修会も実施した。学会や研修についても、昨年度よりコロナの影響で、Zoom 開催や、学会自体が中止になっているところもあるが、今年度は、いろいろな学会や研修の機会が、対面を含め、予定、実施されているので、うまく活用しながら、資質向上に向けて学校としても支援していきたい。

(4) 学習成果

（平賀委員長）
カウンセラーの相談体制が作られているが、実際にこの相談を受ける学生はかなり多いのか。

（稲副校長）
カウンセリングについては、石田先生にも依頼していたが、学生から希望があると、それに対応できるようにカウンセラーの先生に学校に来ていただき、相談を受けられる体制をとっていた。

（平賀委員長）
石田先生、担当されていらっしゃる。実際にどうですか。

（石田委員）
昨年担当したが、女性のカウンセラーも１人増やした成果が出たのではないか。女子学生が多いので、女性のカウンセラーの方が話をしやすいというところもあったと思う。

（稲副校長）
いろいろタイムリーに相談できる機会であることや、頼りになる先生、寄り添っていただける先生等、学生にも、気軽に相談できる機会が浸透するようになったということが、増えてきた理

由だと考えている。

（平賀委員長）
　実際、何人ぐらいの学生が利用したのか。

（稲副校長）
　約 20 人の相談があった。

（杉山委員）
　カウンセリングの項目は、学習成果のところというより学生支援のところの方が妥当と思う。カウンセリングの中身にもよるが、学習、進路の相談とかだったらこちらになるかもしれないが、そうではないので。

（鈴木校長）
　御指摘のとおり、（５）学生支援のところです。大変失礼いたしました。

（杉山委員）
　国家試験の合格率とか、退学の状況を見ると、立派だ。

（石田委員）
　国家試験の合格率は、100 パーセントは達成できなかったとはいえ、実数では１人不合格、去年は全員合格で、入学してくる学生の指導にいろいろ苦労するところはあるにせよ、結局、卒業する時には、国家試験の合格率で 100 パーセント近く毎年できているから、３年間かけて、先生方が引き上げてくださっている、そういう成果は出ているのだろうと思っているので、そんなに心配はしていない。ただ、退学率ですね。退学者を減らす取組として、令和５年度は学校案内やオープンキャンパスの内容を工夫し、とあるが、どんな感じの工夫をしたのか。

（鈴木校長）
　お手元に、今年の学校案内をお配りした。昨年度のものと比べて、学生の直接の声や、顔、写真等も含めて前面に、また１日を時間で追ってどんな生活になるかとか、よりイメージしやすいような工夫をしている。それまでのものが、行政っぽいというか、型にはまったようなところがあったので、だいぶスタイルを変えた。

（平賀委員長）
　よくできている。手に取ってみたくなるような冊子になっている。
　あと、(30)「卒業生・在校生の社会的な活躍及び評価を把握しているか」というのは、前年より下がっていて、こういうのはプラスになっていくと思うが、残念ながら、今年の評価では、昨年より下回った評価になってしまった。卒業生や在校生、特に卒業生について、帰属意識が薄いというか、先輩たちが大勢活躍してるのに、伝わっていない、全く知らない。もう少し、きずな

が強くなっていいと思う。卒業生・在校生の社会的な活躍とかは把握しているが、現実には学生と先輩が繋がっていない。同窓会をもう少し活発にするとか、方法がないかと思う。

(5) 学生支援

（杉山委員）

（36）課外活動のところも低い。時間がないということは、確かにあるとは思うが、学校としては、どのように思うか。

（稲副校長）

コロナ禍で、サークル活動ができないような状況であり、コロナの前にはいろいろなサークル活動もやっていたと聞いているが、この４年間、そういうものもなく、今年度も、まだ再開できてないような状況である。課外活動としては、学生から実習の演習の要望が出ると、実習室で、教員も技術練習の指導にあたるような支援はしているが、従来の課外活動はまだできていない。また、しばらくそういった活動がなかったため、学生自体が動けない。先輩がやっていた活動を続けるのであればすぐにできるが、リーダーシップをとるような者もなく、ゼロから起こすような状況のため、今の学生だと、活動にまで至ってない。

（杉山委員）

自分が教える大学では、ボランティアのような活動をしている学生が結構いて、例えば、地域防災の日のようなところに参加してみるとか、そういうのは学生からは動けないかもしれないので、教員が仕掛けてそういう活動をするもいいのではないかと思うし、そういう活動をしたことを新聞とかで PR すると宣伝にもなる。県立看護はそんな活動をしているんだと認識してもらえるので、マイナスには決してならない。そういうボランティアとか地域貢献のような活動も少し意識して、新聞に載るような他の学校の活動を参考にして、取り組んでみたらどうかと思う。

（平賀委員長）

クラブみたいなものはあるのか。活動はなくても、そういう集まりは。

あることはあるのなら、母体があれば活動もできるのではないか。

また、課外活動として、助産学科の伊豆の国市での健康教育の新聞記事があるが、把握しているか。

（稲副校長）

把握している。

（渡邊静世学科長）

この他にも、論理学の授業の一環で新聞に投稿していて、１学科も２学科も同様に、何人かの学生が掲載されている。

（平賀委員長）
　それは、効果があるのではないか。やる気につながるし、モチベーションになると思う。
　少し評点が下がっているのが、学生の経済的な支援体制で、高等教育就学支援制度や専門実践教育訓練給付金制度など助成制度もあるようだが、経済的な支援体制は、若干足りないのではないかという評価。令和３年度よりは評価が下がっている。各病院の奨学金制度もある。これは、かなり利用されているのか。

（鈴木校長）
　利用は実際あり、就職と結びついているところがある。

（平賀委員長）
　それが経済的な支援と言えるかどうか。
　評価を見ると、経済的支援体制は整備されているとは感じていない、まだ不足しているという意味だと思う。

（鈴木校長）
　経済的支援が整備されているかということについて、教員はまだ不十分だと思っているというところに、どういう見方をして、このような評価になるのかというところで、ちょっとわかりにくい部分があると思う。学生からそういう声も聞くということを踏まえて評価しているのかもしれない。

（平賀委員長）
　先生は学生と普段接しているから、何かあるのではないか。これも大事な問題だと思う。

(6) 教育環境
（平賀委員長）
　この項目については、特に御意見がない。総合点はアップしており、合格点と言っていいと思う。皆さん評価されている。これはよかったと思う。

(7) 学生の受入れ募集
（杉山委員）
　県の方針をお聞きしたいが、２学科は、続けていく予定なのか。

（鈴木校長）
　学生数が減り、定員は 40 人だが、令和になってからは１桁台で、一昨年は入学者が１人というような、低空飛行の状態が続いている。看護師に向けて入学を考える人がいるかとなると、県内で准看護師を養成するところが浜松に１か所しかなく、東部からは遠いということもあり実際に

東部から行く学生はいない。この学校も、50 人定員の学校だが進学者が 10 人もいないということで、准看護師から看護師になろうという人が、潜在的なものは別としても、実際にはなかなかいない。全国には通信制の学校もある。学校だけで答えが出せることではなく、県として、他県の状況なども踏まえて検討していく必要があると考えている。

（杉山委員）
費用対効果を考えるとどうなのかと思う。県の立場で言えば、逆に、通信制のところにお金を出す方が効果的ではないのかと思っている。

（鈴木校長）
この状態のままでよいのか、通信制の学校もあることも踏まえるとどういう形がよいのか、とは思っている。ただ、実際には１人でも２人でも入学を希望する学生がいるので、費用対効果のところは当然考えなければならないことだが、そうした方の受け皿をどうしていくかを考えながらになると思う。

（杉山委員）
お金がないと言われていると思うので、他のところにかけた方がいいと思う。教育効果という意味では、５人以下になるとグループワークもできず、１対１になってしまうのもどうかと思う。

（平賀委員長）
２学科の件については、10 年ぐらい前、評価検討委員会をやって、その時は私も、２学科はだんだん減っていくが残した方がいいと主張した覚えがある。ところが准看護師試験の受験者が多い。准看は全国的に減ってきているから応募者は少ないかと思ったら、若い人は増えていて、確かに現場でも、看護師試験に落ちて、准看護師資格は幸い取ってたから准看で１年間受験勉強しながら働いて、という学生に会ったことがある。准看護師は減っているとは思うが方向性としては残しておかないと。以前は現場でも、不採算だが貴重なコースだった。マンツーマンに近いとか、考えるところはあるが、どこかに門戸を開いておく必要がある。大所高所から決めていくしかないだろうと思う。
学生受け入れ募集に関しては、この学校案内は、１学科については効果があると思う。２学科については、県内には浜松しかなく、県外からも来ていて、学生が集まる範囲が広いので、もう少し広げてみることも必要かと思う。

（杉山委員）
県外の学生は就職で地元に戻ってしまう。

（平賀委員長）
そう、地元へ戻ると思う。また、資格を持っているが病院の現場で働いた経験がない学生もいる。とにかく検討して方針を決めるしかないと思う。
看護協会は４年制大学の方を向いていますね。現時点での動向は４年制だと聞く。

（杉山委員）
　看護協会としては４年制の方針はあるが、個人的には大学と専門学校の両方を残した方がいいと思う。需要と供給で、大学だけでは間に合わないと思うので、専門学校で丁寧に教育していくのも大事だと思う。

（平賀委員長）
　個人的には准看制度があった方がいいと思っている。アメリカでは看護師には２種類ある。

（杉山委員）
　私は、看護師の課程は大学でなくてもいいという考え方で、准看は、最終的にはなくした方がいいと思っている。

（平賀委員長）
　アメリカでは２種類の看護師が、現場の実務を担う看護師と、臨床の中心となって現場を取り仕切る看護師と、それぞれの役割を果たしている、というのが印象的だった。

（石田委員）
　志願者の増加に向けた学生募集、広報媒体を活用して効果的な広報をすることができたと書かれていて、実際検索すると、学校説明会の記事がヒットするので、スマホを使って検索する高校生に、各種広報媒体を活用して、効果的な広報ができていると感じた。
　今回、いろいろ検索したり見たりしていたら、今年度から指定校推薦を実施するのか。

（鈴木校長）
　４年制大学や他の専門学校への進学を理由とする辞退者が多いこともあり、今年度から、選抜方法を見直して、推薦入試に、今までの公募型に加えて指定校推薦を実施し、学生の確保に取り組んでいく。

（石田委員）
　検索したら、看護１学科の公募推薦はずっと行われているが、募集要項に「高校卒業見込み（通信制を除く。）」とあるが、一般入試の方には書かれていないので、公募推薦だけ通信制の課程を除くのはなぜなのか気になる。
　実際、この近辺の、他の看護学部なり看護学校の募集要項を見ると、東都大学、順天堂大学、静岡医療センター附属の看護学校とか、どこも公募制の推薦をやっているが、通信制を除くとは書いていないので、なぜかなと思う。

（鈴木校長）
　どういう経緯があって、見直しをしてそうなったのか、そもそも、この公募型を始めるときからそうなっていたのか、過去に遡らないとわからないので、確認したい。

（石田委員）
今、通信制の高校が増えている。三島、沼津だけでなく、これまでなかったような場所にも教室がどんどん開設され、通信制の高校を卒業する学生も増えていると思うので、そういうところにも門戸を開いていくといいのではないかと思う。
公募型の推薦の方を受ける機会は、結局、通信制であろうが全日制であろうが、卒業すれば高卒には変わりないので、区別してしまうのはどうかと考える。

（鈴木校長）
確認する中で、合理的な理由がなければ、見直していきたいと考える。

(8) 法令等の遵守

（杉山委員）
(49)「自己評価の実施と問題点の改善を行っているか」というところが、少し下がっているが、このアンケートを取った後、この評価委員会に出てくる前に、職員同士で話し合いなどしているのか。

（鈴木校長）
話し合いはしていない。アンケートをやってもらって集計している。

（杉山委員）
基本的には自己評価であって、先生たち自身がどのように感じているかとか、その捉え方が違うかもしれないので、まずは、この委員会に出てくる前に、先生方の話し合いというか、結果を報告して意見を交わすような時間をとるといいという気がする。自分の受け止めが違っていることがあるかもしれないので、そういう齟齬がなくなってくる気がする。

（鈴木校長）
教員の認識が、フィードバックされてない部分もあるかと思うので、全体としてはこういう結果が出たということを個々の教員が知った上で、意見を聴く場をもつことは、今後考えていきたい。

（平賀委員長）
自己評価は実際やっているので、後半部の問題点の改善という部分が見えにくいからではないか。それで、皆さんの評価が下がる。他のところはみんな評価が上がっており、問題点の改善を行っているか、というところが評価が低い。

(9) 社会貢献

（平賀委員長）

昨年度と比べると、評価が上がっている。この９項目のうちで、ここが一番ポイントが上がったところ。外に出向いて、メディアに紹介されるなどのことが、大勢の眼に触れて、プラス効果になっているのだろう。

（平賀委員長）

第１から第９まで、皆さんの意見を集約すると、意見交換になろうかと思う。全体的には上がったが、学生の受け入れ募集のように下がったところもある。これをまとめていただいて、学校運営に活かしていただければと思う。

この評価についてはよろしいか。

（杉山委員）

この評価は、職員のアンケートですね。最終的には、学生がこの学校をどう評価しているかという視点も大事、そちらの方が大事だと思うので、アンケートを取ったらどうか、と思う。集計するのが大変だとかの意見も出るなら、google フォームなど使えば、一発で表まで出てくるので、そういうものを使いながら、学生がどのように捉えてるかという視点で、そういうような評価も合わせてお願いしたい。項目は変えないといけないが、見方が違うと思う。

また、実習病院の意見も、悪い意見ではなくて、評価は高いと思う。実際に実習に行って、看護部長さんたちからお話を聞いたりすると、卒業者も多くいるし、頑張ってくれてるよという声もあると思うので、数字では出ないかもしれないが、そういう意見もあったというのは、質的な評価になるので、そういう意見を集めておくと、またこういうパンフレットなどにも使えるし、外に出せていけるものなので、そういう声も大事にしていただいたらいいと思う。

（平賀委員長）

学生のアンケートは、授業や講師に対してとっていると思うが、どのように扱っているのか。

今の意見は、教官に対する評価だけではなくて、ここにあるような項目の視点で、学生にも聞いてみたらどうか、という意見だったと思うが。

もう１点、この委員会の役割で、この学校評価についての意見交換と、もう１つは、学校の教育や運営改善のための意見というのがあったと思うので、先生方から提案があったらお聞きしてみたいと思う。今の杉山先生の意見もその提案のひとつかもしれないが、他にいかがか。

（石田委員）

評価をしたら、フィードバックが大事になってくるので、そういうところをやっていくと、最初の方の、２の運営組織や意思決定、不適切、やや不適切が 50 パーセントというようなところの改善などにも繋がっていくのではないかと思うので、ぜひフィードバックをやっていただけるとよいと思う。

（平賀委員長）

私の方から、多分去年も申し上げた、ひとつは講師会。以前やったことがあるので、やりにくいのかどうかわからないが、学校の方針とか、IT 化とか、いろいろな対応方針のもとで運営されているものや、合格率などを、講師の先生に伝えるような機会をつくる方がいいのではないか。一人一人の先生に知らせる機会がないので。あるいは、入学式や卒業式のセレモニーの機会に声をかけて、参加してもらったらどうか。

もうひとつは、講師室にドリップコーヒーがあったのが、なくなってしまったが、コーヒーサービスのようなものがあった方がいい。予算が絡むのかもしれないが、講師が気分よく教えられる雰囲気をつくることも大事だと思う。

４　閉会

（稲副校長）

長時間、議事進行いただき、ありがとうございました。委員の皆様には、前回まではウェブ方式で、十分な意見を聞く機会が持てなかったが、今回は対面で御来校いただき、本当に多くの貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。いただいた意見を今後の学校運営に活かしていきたいので、今後とも引き続きよろしくお願いしたい。

以上で、令和５年度第１回静岡県立看護専門学校　学校関係者評価委員会を終了する。